

## 大通公園を望む窓辺から

### 運動会の光と影

常任理事 藤井 美穂

リラ冷えが続く中、大通公園のライラック祭りもいつの間にか終わりました。やっと初夏到来と楽しみにしていると今度は蝦夷梅雨。小学校の運動会シーズンで、週末のぐずついた空模様の朝、毎週開催の花火があがっています。運動会といえば、子どもの出番を懸命に撮影するお父さんと、シートが敷かれた親席のごちそうの山を囲む子どもたちのお昼が当たり前のシーンでしたが、最近では学校によっては運動会のお昼は親とは別に給食にしていると聞きます。手作りのおいしそうなお弁当を囲む幸せそうな家族を横目に、一人お弁当を食べなければならない子どもの寂しさを考え、みんな校舎に入り給食にしているとのこととです。

昨日NHKの子どもの貧困についての番組を見ました。日本の貧困は、可処分所得が全人口の中央値の半分未満の相対的貧困であり、ざっと4人家族で年収250万円未満の世帯です。相対的貧困率は、国内の所得格差に注目する指標で、日本はOECD加盟先進国30カ国中、貧困率は4番目に高いと報告されています。子どもの貧困率は1990年代半ばころから年々上昇し、現在16.3%、実に6人に1人の子どもが貧困に喘いでいます。そんなに貧困が身近なものか、意外かもしれませんが、学校格差や地域格差があり、見えにくいのが現状です。就学支援受給率が0.3%の学校もあれば50%を超えている学校もあるのです。

ノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマンは、幼児期から自己肯定感を育てることが大事であり、教育政策の重要性を指摘しています。アフリカの就学前の子どもを2群に分け、1群は週に1回教育し目標達成のPDCAを植え付けさせ、他方はアフリカの通常の生活で成長した群に分け40年間観察したのです。月額2000ドル以上の収入を得るものは、教育群では教育しなかった群の4倍、また教育群では他群の3倍も持ち家を持てたとの結果でした。

久しぶりに青空だった今朝、ランドセルを背負った可愛い小学生たちに、押しつぶされないで伸びやかに育ってほしいと、何ができるか考えながらハンドルを握って出勤しました。

### 頑張れ！ CCL

理事 久島 貞一

人口の減少、高齢化はおそらく全ての地方都市が抱えている問題であり、この状況に対応していくことが街の存続のみならず地域医療にとっても大きな課題です。居住区域や都市機能を集約しなければ地域住民の生活の利便性を確保することが難しくなります。そんな街づくりの中で、地域の住民の皆さんが安心して暮らせる医療を提供するためには医療施設がそれぞれの機能に応じて住み分けることが必要になります。釧路にはCCL（本音で地域連携の在り方を検討する会）の皆さんがいます。多職種連携による医療のネットワークづくりが街づくりにつながるという情熱を持って集まった人たちです。Cooperate（連携する）、Create（創造する）、Live（人生を楽しむ）の頭文字をとり「くくる」と称し、関係する専門職種を括り、関係機関を括り、釧路管内を一括りにすることを合言葉にして2010年から活動しています。

多職種連携の現状把握と課題の分析をするための専門職への意識調査、研修会の開催「ごちそう（互・知・創）サロン」の開催等で実現した顔の見える関係の構築などから得た知識や技術が集積された医療介護の連携推進ハンドブック「CCLブック」が2015年に発行されました。連携のための心構えとマナーなど、内容は宝の山です。多職種連携を成功させるためには「患者さんとその援助者が何を望んでいるのかを確認し、ニーズを実現するためのゴール設定を皆が主体性を持って話し合い、共通の目標を立てることが必要」という彼らの考え方が医療、介護等に携わる人たちや地域住民に浸透し理解されたとき、初めて医療が住民に信頼され、郷土愛にあふれた「医療による新しい街づくり」が実現すると信じています。

2025年には私も後期高齢者、余生をどのように暮らすのか。在宅医療にとどまらず「看取り」まで視野に入れた彼らの今後の活動に期待しながら応援したいと思っています。

